

チャレンジ！！オープンガバナンス 2017 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注1)	No.	タイトル	自治体名
	- (事務局用)	JR 安土駅前の魅力づくり	近江八幡市
アイデア名 (注1) (公開)	オープンストリートマップを用いた世界でひとつの安土地図		

(注1) 地域課題タイトルは、COG2017 サイトの中に記載してある応募自治体の地域課題名を記入してください。

(注2) アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。

1. 応募者情報

チーム名 (公開)	安土 えき・まち マッピングプロジェクト		
チーム属性 (公開)	<input checked="" type="checkbox"/> 1. 市民によるチーム	<input type="checkbox"/> 2. 学生によるチーム	<input type="checkbox"/> 3. 市民、学生の混成によるチーム
メンバー数 (公開)	6名		
代表者情報	氏名 (公開)	的場 保典	
メンバー情報	氏名 (公開)	小跡 敦、田口 真太郎	

(注意書き) ※ 必ず応募前にご一読ください。

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2017_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2017 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin_padit_cog2017@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：
「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示—非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。
(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)
4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)
5. この応募内容のうち、「審査項目自己評価」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、や知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「審査項目自己評価」中も同様をお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。)

2. アイデアの説明（公開）

（1）アイデアの内容、（2）アイデアの論拠、（3）実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

（1）アイデアの内容（公開）

アイデアは、だれが、何を、どこで、いつ、どのように、する公共サービス（活動）なのか、これらの要素を入れて**内容そのもの**をわかりやすく示してください。**1 ページ以内**でご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

滋賀県近江八幡市安土町は、織田信長が安土城を築城し整備した城下町として全国的に有名であり、中世以降の歴史遺構が現在も数多く残るまちである。現在の安土駅周辺は安土城の城下町エリアであり、琵琶湖を利用した湖上交通の港や船着場があったが昭和初期の干拓事業によってほとんどが消失してしまっている。また、駅前商店街は現在シャッター通りになってしまっているが、昭和期にはたくさんの店舗が集積しており、店舗や建物に限らず祭礼行事や地域のイベントなど有形無形の多彩な地域資産を有していた。

しかしこのような地域の豊かさも、近代化と少子高齢化に伴い、街の風景は大きく変化し、地域の記憶も次世代に伝えられることなく徐々に失われてしまっているのが現状である。

そこで、地元で生まれ育ち長年生活をされてきた住民しか知らない情報や、観光情報誌にも載っていない地域の見どころや情報など、地域の多岐にわたる情報を市民が主体となってアーカイブ化し誰でも活用可能なデジタルツールとしてオープンストリートマップ等の ICT ツールを活用してオープン化し、市民・移住者・観光客等へ情報発信を行うことが出来るプラットフォームづくりと持続可能な活動組織づくりを行う。

■主体（だれか）

- ・市民・安土町商工会・まちづくり会社・市役所等からはじめ、今後は地元団体や学生等の協力を得て事業推進体制を構築する
- ・市民、移住者、観光客双方の相互扶助と相互協働による

■具体的なアクション（何を）

- ・地域に残る古写真や資料をもとに、地元の方から失われた風景や出来事、過去の生活や風習などのヒアリングを通じた情報収集
- ・オープンストリートマップ等の ICT ツールを用いて、郷土教育・防災情報・移住者向け情報のアーカイブ化
- ・空き店舗の活用事例などの情報発信
- ・商店街をはじめとする店舗情報や新商品・サービス・特産品等の情報発信

■主体的な場所（どこで）

- ・安土駅周辺（半径 1 k m 圏内）

■施策を実施する時間（いつ）

- ・住民の普段の生活
- ・移住者は地域情報を知りたい時
- ・観光客の滞在時間全てを通じて

■施策の概要（どのように）

- ・オープンストリートマップ等 ICT を用いて情報発信するプラットフォームを作成する
- ・今後、地図づくりに関する作業を誰でも参加可能なイベントとして開催し、毎回取り組むテーマや活動内容を設けることで、デジタル地図の情報充実化を図る
 - 古写真と現在の写真の遍歴、古地図を元に当時の地形を作成、Wikipedia と連動して文化財を知ってもらう（WikipediaTown の開催）、通学路などの住民が普段の生活で危険に感じる場所などの情報、避難場所などの防災情報（観光客にとっても必要）、店舗情報、イベント情報・・・等の情報発信を行う

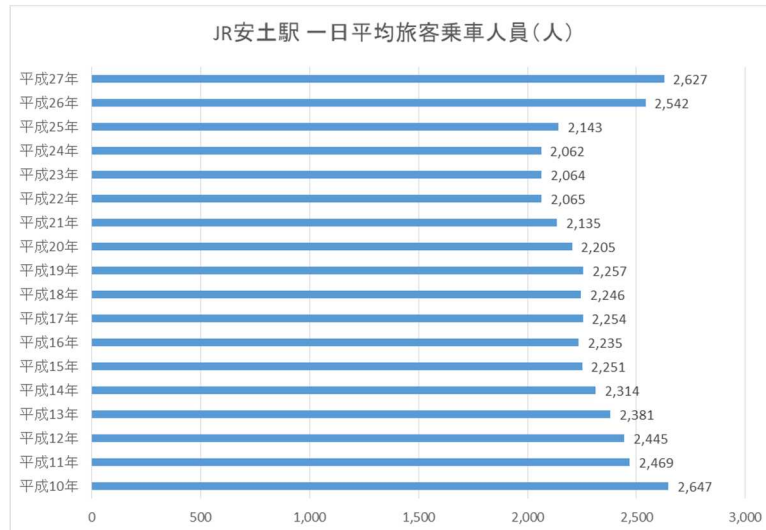
(2) アイデアの論拠（公開）

アイデアの論拠（なぜこのアイデアなのかの理由付け）について、それをサポートするデータ（統計類の数値データやアンケート・インタビューなどの定性データ）や証拠（資料や計画、既存の施策など）（以下：総称して「データ類」といいます）などを含めつつ、2 ページ以内でご記入ください。データ類は出所を明らかにしてください。

■ 論拠

「安土」という名前は、日本人のほとんどが聞いたことのある名前ですが訪れたことはない「まち」である。それを示すように JR 安土駅（以下、駅とする）の平成 27 年度の一日平均旅客乗車人員は約 2,600 人となっている。

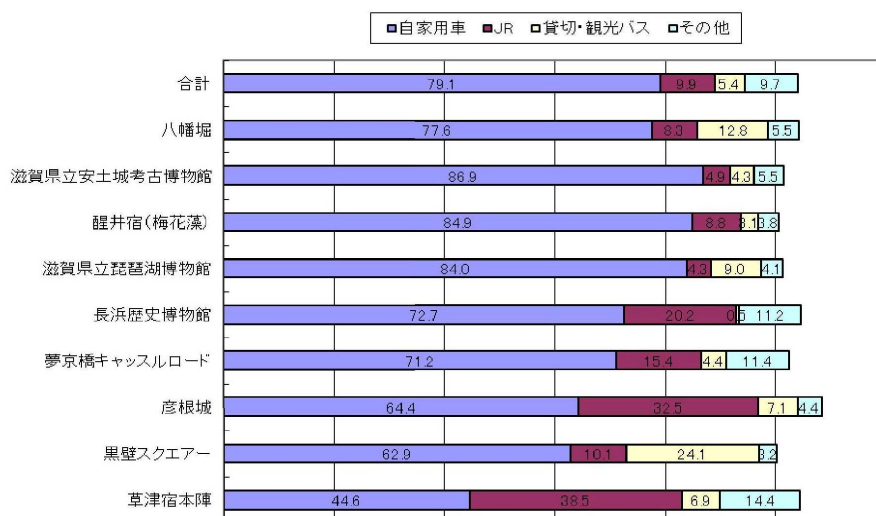
【データ出典：H10～H27 滋賀県統計書 JR 運輸状況 一日平均旅客乗車人員】



駅前商店街も最盛期には約 30 軒が軒を連ね、商店街に行けば何でも揃っていたが、今では 12 軒と当時の面影を感じることができない。

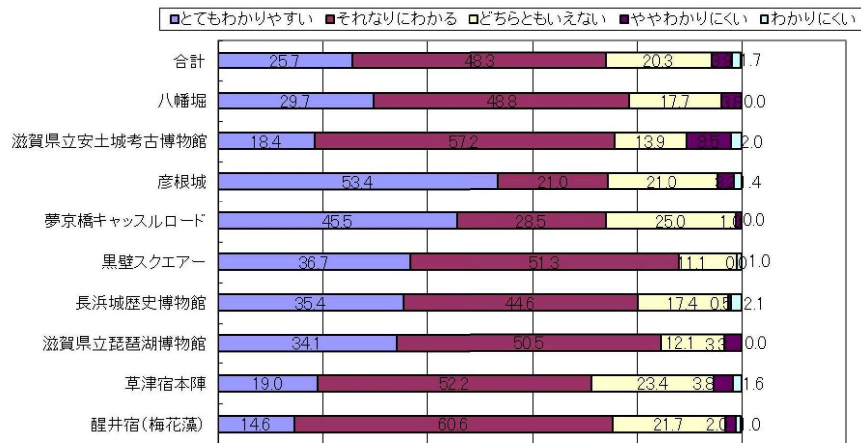
安土町の代表的な観光施設である「滋賀県立安土城考古博物館」への観光客のアクセスは、自家用車が 86% を越え、最寄駅である JR 安土駅の利用が進んでいない状況がわかる。【データ出典：近江八幡市観光振興計画】

図 5-2 観光客利用交通機関（調査観光地点）



また、「滋賀県立安土城考古博物館」へのアクセス案内について、県内の他の歴史的施設と比較して、「とてもわかりやすい」という比率が低い状況にあることがわかる。【データ出典：近江八幡市観光振興計画】

図 5-4 観光案内看板等の評価（調査観光案内）

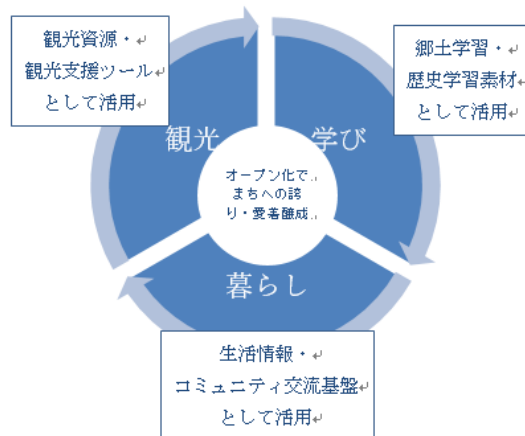


駅周辺には古い町並みや文化財、湧き水や船着場だった親水空間などの地域資源が多く、地元住民しか知らない情報や古写真も数多くあるが、説明を気軽に聞くことも出来ず次世代に伝える手立てがなく、今後過去の出来事や風景を知る人たちが徐々にいなくなっている。

安土の風土・文化の伝承、また、駅周辺に新しい人の流れを創り出すため、四季折々のビュースポット等地元住民しか知らず観光情報誌にも載っていない地域のニッチな情報、駅を起点とした安土城跡をはじめとする文化財へのアクセス方法を市民自らの手で、市民・移住者・観光客等へ発信・アーカイブ化を行う必要がある。そのための手法として、オープンストリートマップ等の ICT ツールを活用したオープン化に取り組むこととした。

オープンストリートマップは誰でも利活用可能なオープンデータであることから、単にデジタルアーカイブ化だけに止まらず、商工会と連携し地域の観光マップとしてオープンストリートマップを活用した印刷物としての活用も進めている。また、プロジェクト参加者が実施する地域でのイベント広報のマップとして活用して、今後多様なシーンでの活用を検討している。

- ・住民にとっては歴史と自然という地域資源が豊富な安土を再発見し、また懐かしい風景をもとに過去・現在・未来の各世代をつなぐオープンストリートマップ
- ・移住者にとっては地元独特の風習やしきたりが一覧でき、コミュニティーに溶け込むためのオープンストリートマップ
- ・観光客にとってはおすすめコース（徒歩・自転車・自動車）や、所要時間、特産品メニューなどの知りたい情報、また土地勘のない地域で災害などにあった場合の避難場所などの防災情報を得る為のオープンストリートマップ



※プロジェクトのイメージ

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを**実現する主体**、アイデアの**実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）**の大きな規模とその現実的な調達方法（制約がある場合にはその解決策を含む）、アイデアの**実現にいたるプロセスとマイルストーン**等、アイデア実現までの大きな流れについて、**2 ページ以内**でご記入ください。（必要に応じて図表を入れても構いません）

施策のマイルストーン

STEP 1：検討会開催（9月）

市民、安土町商工会、まちづくり会社、市役所等により検討会を開催しオープンストリートマップを活用したオープンデータを自分たちでつくることを決めた。

STEP 2：実証実験・実地研修（11月）

オープンストリートマップを取り入れることの準備として、11月10日～12日の3日間で総務省「地域情報化アドバイザー派遣制度」を活用してアイデアを具体化するイベントを開催した。

主要メンバーや各種団体に声をかけ、延べ53名の参加があり2・3日目には小学生・高校生の参加もあった。

1日目（セミナー・ワークショップ）

オープンデータについての基礎的な話や先進地での活用事例、活用の可能性を学んだ。

その後、ワークショップを行いオープンデータに実際に触れて使う（調べる）事で新たな発見や問題点に気づき翌日以降の地図に残すものを決めた。

2日目（セミナー・フィールドワーク・データ作成）

オープンストリートマップを用いた活用事例や技術（アプリ）について学び、前日決めたターゲットを探しにグループごとに現地調査を行い、オープンストリートマップに入力し地図作りを行った。

3日目（セミナー・データ作成・フィールドワーク）

uMap（アプリ）の使い方を学び、古い写真や前日のフィールドワークで見つけた情報（店舗・文化財・駐車場など）を入力したオリジナルマップの作成し、それを見ながらもう一度フィールドワークを行い改善点や新たに必要な情報を確認した。

■成果

・オリジナル地図「あづマップ」を作る事が出来た。

（https://umap.openstreetmap.fr/ja/map/map_179098#15/35.1458/136.1312）

・参加者同士で今後の継続していくための方法を考え、今回の活動を継続していく方向性を確認した。

STEP 3：活動の継続（12月・1月）

上記3日間のセミナーから継続した取り組みにしていけるためにセミナー参加者や主要メンバーで今後につなげていくためのワークショップを開催し活動を継続していく。

12月13日、「安土 えき・まち マッピングプロジェクト」のミーティング…世界でひとつの安土地図をつくるための具体的なアクションについて、打合せ

2018年1月13日にフィールドワークを行い地図のコンテンツ強化を図る予定…現在、市民を中心に参加者を募集中

■各種団体との連携の可能性

近江八幡市

→過去の広報誌や市所有の情報（写真など）の提供を依頼する。

安土町商工会

→新規出店情報、商店街等イベント情報、活用可能な空き店舗などの情報提供を依頼する。

まちづくり会社

→マッピングイベントと連携したまちづくりイベント開催を依頼する。

安土学区まちづくり協議会

→・まちづくり団体のデータ（団体名・活動内容・場所・範囲など）を提供していただき、地図に反映した「まちづくりマップ」を作成する。

・安土学区の月に一度の広報誌「安土のWA！」に掲載されるイベント情報の提供。